

第二回 平成二十六（二〇一四）年五月十七日

## 「夙川・知の散歩道―夙川と大手前大学―展」の鑑賞

【期間】五月十九日（月）～五月三十一日（土）※二十五日（日）休館

【会場】大手前アートセンター―地階ギャラリー―

四月の講座で紹介した資料を中心に、本学が夙川の地に開学するまでの時代にスポットをあてた展示をご覧いただきました。

### 「展示内容」

#### 一、福井治兵衛（岬公）と縁のある人々の紹介

―パネル展示―

- ① 年 表 福井治兵衛と藤井健造
- ② 写 真 福井治兵衛と藤井健造、そして縁のある人々の紹介（敬称略）
- ③ マンガ 『永遠に夢を追う青年』―藤井健造理事長評伝『風化なき騎将』より―

（作画・佐藤晴美教授／「大手前学入門」コンテンツ 二〇〇九年）



## 福井治兵衛

本名・芳松、俳号・興公  
(明治三十一(一八九九)年〜昭和三十九(一九六四)年)  
松荘洋館前で(昭和九(一九三四)年十二月)

西宮の高橋家に生まれ、十七歳の時に福井家の家業・味噌製造業「阿波屋」に従事する。十九歳の時に福井政江と結婚。二十一歳の太正九(一九二〇)年に御茶家所町(当時は大社村森貝)に移居する。昭和四(一九二九)年の西宮市会議員選挙に当選、以後二期勤める。昭和八(一九三三)年には家名・治兵衛を襲名し、阿波屋を会社組織に変更する。当時の工場は六千坪の敷地を有していたと伝えられる。乗馬と俳句を趣味とし、他、歌舞伎、浄瑠璃、釣り、絵画など多芸多才であるだけでなく、画家、芸人、文筆家などの活動支援にも力を入れ、自身でも西宮新聞の発行、俳誌・文芸誌の編集・発行をてがげた。活動後は、工場が空襲で焼けたため江戸時代から続いた家業は廃業せざるを得なかった。そんな中、藤井健造からの紹介があり、ジェイコフ・デシエーザ夫妻の仮寓に福井邸を提供したことがきっかけで、学校法人西宮学園を設立する。デシエーザ氏が昭和三十五(一九六〇)年に独立の教会を造るにあたり学園は解散し、土地と建物を学校法人大手前女子学園に寄附した。昭和三十九(一九六四)年、夙川に大学が開学するのを見届けることなく没している。

## 藤井健造 (明治三十九(一九〇六)年〜平成三(一九九一)年)

学校法人大手前学園の創立者。守口の樋口家に生まれ、幼い頃から馬に興味を持ち、大学在学中も馬術部に所属し活躍する。また在学中に藤井加代と結婚し、長女三奈子が生まれた。卒業後は、神戸又新日報社に記者として入社するが、仕事よりも馬と車に情熱をもちやした。

昭和七(一九三二)年のロサンゼルスオリンピックで馬術部門に西竹一騎手が出場することを知り、自費通信員の資格を得、民間人で唯一の付き人として同行渡米する。オリンピック終了後はすぐに帰国をすることなく、ヒッチハイクで米国大陸を横断しニューヨークまで旅をする。この時の経験は、終戦後に創設した大手前文化学院での教育方針のもととなった。昭和二十四(一九四九)年に長女・三奈子が福井治兵衛の長男・律と結婚する。翌年には短期大学の設置認可がおりた。昭和三十五(一九六〇)年には、西宮学園が解散するにあたり、福井治兵衛から夙川の土地・建物が寄附される。それから四年後に大学設置の申請を行い、昭和四十一(一九六六)年に大手前女子大学を開学し、現在の学校法人大手前学園の基盤をつくった。



西 竹 一 (明治三十(一九〇二)年～昭和二十(一九四五)年)

昭和十(一九三五)年四月二十八日横浜大会にて  
福井治兵衛のアルパムより。昭和十(一九三五)年の横浜公園グラ  
ンドでの馬術大会での写真。(写真左、右は福井治兵衛)  
他、夙川の福井邸で今村中佐と西大尉が福井治兵衛と一緒に写ってい  
るものが保管されている。

男爵・西徳次郎の息子。十歳の時に父をしくし、男爵を継ぐ。また相次いで家族をなくし、  
天涯孤独の身となるが、後見人の西伊三次はじめ周囲の人々にあたたかく見守られ育つ。  
大正五(一九一六)年に軍人の道を歩むようになると、本気で乗馬の練習を始めた。昭和  
二(一九一七)年に習志野騎兵学校へ入校した。のち教官の今村少佐から、名馬ウラヌス号  
をすすめられ私費で購入。後、この愛馬と昭和七(一九三二)年のロサンゼルスオリンピック  
クで優勝し、パロン(男爵)西の名は世界に広がった。昭和十九(一九四四)年に戦車第  
二十六連隊長として硫黄島に向かい、帰らぬ人となった。

【栄光の金メダリスト 西竹一とオリンピック馬術】馬の博物館根岸鶴馬記念公苑  
昭和五十九年(一九八四)年四月

# 永遠に夢を追う青年

作画 / 佐藤晴美 「風化なき騎将」より





## 二、大手前大学のカルチュラルルーツ

### (一) 阿波屋味噌製造所について

―パネル展示―

① 地図―宮前町にあった波屋味噌製造所

(大正五(一九一六)年武庫郡西宮町全図／西宮市中央図書館蔵より部分)

② 『西宮鳥瞰図』吉田初三郎画(昭和十一(一九三六)年)を吉井貞俊氏写す(昭和六十(一九八五)年)部分

③ 阿波屋味噌製造所広告(「艸公切り抜き集」より)

④ 阿波屋味噌蔵遠景―宮前町・大正時代―(『目で見る 西宮の一〇〇年 西宮市全域』郷土出版、平成十二(二〇〇〇)年三月)より

―実物展示―

⑤ ○あ まろ 味噌の看板

### (二) 福井治兵衛(俳号・艸公)と俳句

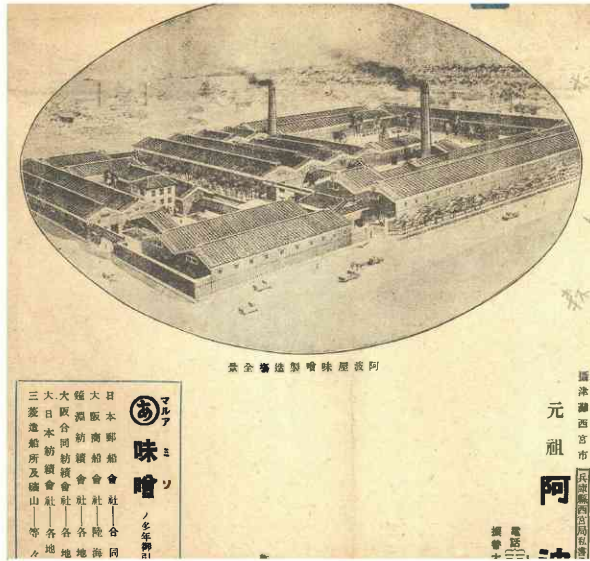
―パネル展示―

① 『酒に関する名句と拙句抄』(福井艸公編、昭和三十八(一九六三)年)より

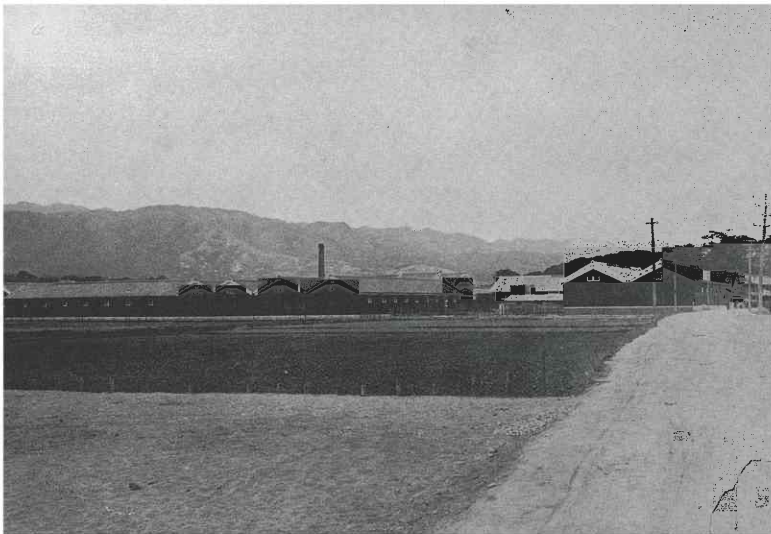
松瀬青々の句を十句、艸公の句を十二句



(1) - ①: 大正5 (1916) 年 武庫郡西宮町全図より (西宮中央図書館蔵)



(1) -③：阿波屋味噌製造所廣告（『艸公切り抜き集』より）



(1) -④：阿波屋味噌蔵遠景（宮前町）  
『目で見える 西宮の100年 西宮市全域』郷土出版（平成12（2000）年3月）より



《松瀬青々の名句抄より》

道頓堀柴藤

酒は白鷺あまごの反りの春寒き  
橋に逢ふ酒友達と春の雪

艸公の案内にて「播重」女の義太夫を  
巨口と共に聞きての帰り南地の旗亭にて小酌す  
杯を我が妹とし臚語るなり

甘酒屋打出の浜におろしけり

ウイスキーの少しが味す砂糖水

新酒は常の酒より濃くありし

雪の文出そうとしつゝ酔いぬたり

雪と梅と酒と此ころ松葉蟹

推敲の気を養ふや玉子酒

牡蠣船に十年この方の酔いが出て

《福井艸公の拙句抄より》

やゝ酔つて子の書初めをかかげたり

酒と餅に倦むこと知らず松の内

初旅の子が土産なり烏賊徳利

風流は論ずる勿れ花の酒

酒の座を互に見つゝ花の山

酒蔵一見の帰路

春の雪つれしと酒の粕さげて

辰馬力氏より毎年新粕を頂く

春寒に人情こもる酒の粕

老弱の我を引立て、長男夫婦（孫二児共）が自動車を運転して、

貴船鞍馬に遊ぶ（昭和三十六年）二句

一宿の瀬音涼しく微酔かな

鮎塩焼十年振りよ宿の酒

玉子酒子等の成長ぼつと見る

西行の歌を想い出て

願はくば新酒の下に我死なん

黒田重太郎氏より紺綴袷傘下賜記念として薔薇図を頂く

一軸の清美に酔ひつ春の宵

(2) - ① : 『酒に関する名句と拙句抄』(福井艸公編・昭和38 (1963) 年より)

### 三、艸公の文化活動と著作

― パネル展示 ―

① 総合芸術雑誌『海松 Mirror』の創刊号

― 実物展示 ―

② 『海松 Mirror』創刊号／第五号／表紙画 黒田重太郎

③ 艸公発行の句集・八冊、関連俳誌

『穂麦俳句集』(装幀／入江来布、大正十二(一九二三)年)

『新田俳句集』(題句／松瀬青々、昭和三(一九二八)年)

『古句評釈』(昭和四(一九二九)年)

『海松』一卷／五卷(表紙画／黒田重太郎、昭和四(一九二九)年／昭和六(一九三一)年)

『初荷俳句集』(装幀・挿画／山口草平・金森觀陽、昭和六(一九三一)年)

『小萩句集 天の川』(昭和十二(一九三七)年)

『艸公句集 雪柳』(装幀／黒田重太郎、昭和三十(一九五五)年)

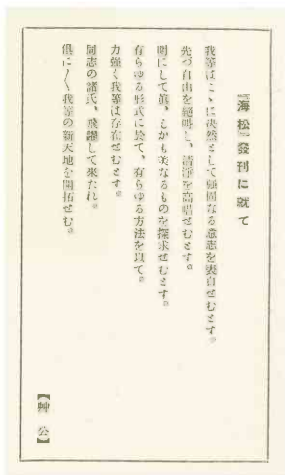
『酒に関する名句と拙句抄』(昭和三十八(一九六三)年)

『俳句集 冬柳』(装幀／黒田重太郎、昭和三十八(一九六三)年)

俳誌「穂麦」

④ 艸公の切り抜き集・絵葉書集

⑤ 西宮芸術講演会開催チラシ



①：『海松』創刊号より  
 表紙 表紙画／黒田重太郎



③：艸公発行の句集8冊・関連併誌

四、西宮学園から大手前学園へ

— 実物展示 —

- ① 西宮学園の入学案内チラシ
- ② 艸公の切り抜き集



①：西宮学園の入学案内チラシ





パシフィックインスティテュートの教室となっていた御茶家所町の福井治兵衛邸洋館



昭和37（1962）年 御茶家所町に建設された短期大学寄宿舍の西宮学寮を眺める藤井健造理事長と、福井律・三奈子の家族（長男・有、次男・要）

五、福井治兵衛（艸公）と黒田重太郎の交流について―絵画作品を中心に―

―パネル展示―

① 黒田重太郎について

② 『閑庭惜春』制作のエピソード

―実物展示―

③ 福井治兵衛（艸公）宛て葉書（艸公の絵葉書アルバム）

④ 黒田重太郎執筆の新聞連載記事のスクラップ（艸公の切り抜き集）

⑤ 絵画作品『晚楼』『閑庭惜春』『肇暑』（三部作）

⑥ 絵画作品『シャルトルーズの庭』

⑦ 絵画作品『雪齋』

⑧ 絵画作品『罌粟の花』

⑨ 絵画作品『残菊』

## ①黒田重太郎について

福井治兵衛（艸公）と黒田重太郎の出会いがいつの頃なのかさだかではないが、艸公の句集『雪柳』（昭和三十（一九五五）年刊）に寄せた重太郎の序文には「艸公さんとの交友も、思えば久しいもので、溯れば大正年代になる。互いに気ままに云い合つて来たが、私に取つては芸術のよき理解者でもあれば、句作のよなき先達でもある。」とあり、また重太郎の第一次渡欧（大正五（一九一六）年―七（一九一八）年）の帰国の際に艸公が旅費を工面したと伝えられていることから、すでに大正五年頃には出会つていたのであろう。

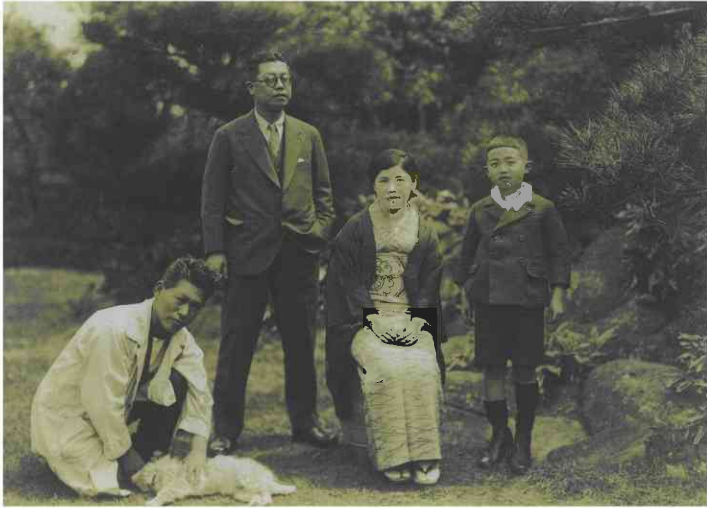
黒田重太郎は明治二十（一八八七）年生まれ。大阪で育つ。幼い頃から文学に憧れ、家業の呉服業を継ぐべきところ絵を描くことに熱中するようになった。当初は親も反対していたが、京都の鹿子木孟郎、そして浅井忠に弟子入りをする。その後、高島屋の図案部の仕事を一年半、帯の図案描きなどのアルバイトをしながら画業に専念することを決心し、浅井門下の安井曾太郎から滞欧作を見せられ発奮し、大正五（一九一六）年、第一次世界大戦さなかに渡欧した。大正七（一九一八）年パリの戦火が激しくなると南フランスを巡つてから、ロンドンへ渡り日本に向けての出港を待つ。その間、松方幸次郎と知己を得、度々画廊へも同行し、彼のこ

レクシヨンの購入にもたちあつている。

帰国後は主に『制作』『中央美術』への執筆を手がけるようになり、大正八（一九一九）年には第六回二科美術展覧会にて滞欧作を発表。二科会友に推挙されている。

大正十（一九二一）年五月、艸公は重太郎の出世作と言われている『雪霽れ』（大正九（一九二〇）年・第七回二科展）を受取つている。同年六月の重太郎からの八ガキには「御送りのもの本日たしかに入手御配慮の程厚く感謝します：云々」と、その作品に対する返礼があつたことを伺わせる文面とあわせて、その年十月の渡欧を前にして、著作を一つ仕上げたとの報告がある。この重太郎にとつて二度目の渡欧にも、艸公は支援を惜しまなかつたようだ。のみならず、帰国後二年目の大正十四（一九二五）年には、西宮市の広田神社前にアトリ工付きの新居を用意した。だが残念ながら、重太郎は妻雅さんを亡くしたこともあり、広田での生活は一年にも満たず、京都へ戻ることになった。その後、次第に画業にも勢いが増し、信濃橋洋画研究所等での後進の指導や、技法書・美術史書・随筆など執筆家としても活躍を見せ、関西の洋画壇の礎を築いた。





② 《閑庭惜春》(黒田重太郎・昭和8(1933)年)制作時の写真

② 《閑庭惜春》(黒田重太郎画・昭和八(一九三三)年)  
制作のエピソード

本作品のモデルは艸公の家族で、  
夙川の私邸の庭で描かれたもの。

作品タイトルも艸公が自らつけたという。

画家がモデルの種明かしをしている下記の記事からも、  
その親交の深さが偲ばれる作品である。

— いくつか私が、女房や子供を描いていたところ、  
「君の一家で画になるのなら、俺の家族だつて画  
になるだろう」とすすんでカンバスの前に  
立ってくれた、俳人で、市議会議員で、ミソ屋  
の主人である友人一家です—

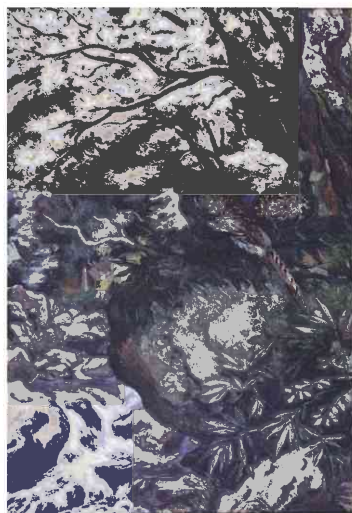
(昭和八(一九三三)年九月毎日新聞)



⑤三部作 中央 《閑庭惜春》(黒田重太郎・昭和8 (1933) 年)



⑤三部作 左 《肇暑》  
(黒田重太郎・昭和11 (1936) 年)



⑤三部作 右 《晚櫻》  
(黒田重太郎・昭和9 (1934) 年)



⑥ 《シャルトルーズの庭》(黒田重太郎・大正11 (1922) 年)



⑦ 《雪霽》(黒田重太郎・大正9 (1920) 年)



⑧ 《嬰粟の花》(黒田重太郎・大正14 (1925) 年)



⑨ 《残菊》(黒田重太郎・昭和7 (1932) 年)